

報



會

會 岳 山 本 日

39

月 十 年 九 和 昭

山岳會への註文一つ

浦松佐美太郎

此の頃、上高地が俗化したの、山が俗化したのといふ不平が、あつちこつちで大分書かれてゐる。

俗化したから、そんな所へはもう行かないといふ人も大分あるやうだ。惜しいことだと思ふ。こういふ人達に當世の俗化した現場を見ていたゞいて、嚴然たる批評を賜り度いものだと思ふ。併しそれもかなはないとならば、致し方もない。

致し方がないとは云つたが、この致し方がないはこの事だけで、本體の山の俗化の方は致し方がないでは済まされない。

上高地の俗化が頻りに云々されてるけれど、同じ上高地にある山そのものゝ俗化の方は、それ程にも細かに論じられてはゐない様だ。之は前者には想ふ人の情緒に觸るゝものが多いせいでもあらう。併し私は、上高地を捨てゝ山を護り度い。それ程山も劣らず負けずに俗化してゐる。河童橋の袂を、横尾谷入口の所、穂高縦走路入口の大理石を見るが、私は此の石碑そのものが山の風致を俗化せしめたといふのではない。「穂高縦走路」といふ文字を暫し眺めてその齷す様の意味合ひを考へられることを願ひ度い。

此の頃、槍穂高縦走が難しい山登りですなんて云はうものなら、フツ

ンと鼻先で片附けられるだらう。日本の山は、槍穂高でさへも、道を付け様と思へば、すたこらと附けられるのだ。山を拓いて、大衆を山に遊ばしめる爲めに出来たのかも知れない。山で遭難者があつたが爲めに、あすこの岩角は危いからと、到頭岩が削られて平な道になつたのかも知れない。私はその動機を、その意思を云々するのでない。併しその結果は明に山の俗化である。

私は此處に動機の問題に觸れた。地元の人達は、山が安全になつて、多勢の人が来て呉れゝば、土地が繁榮するのだから、地元の人達の多くは、土地繁榮の動機から山に手を付ける。色々のお役所等では、山に遭難者の少くない様に、出来る丈多くの人が山に來る様に、山に設備を施してゆく。

之等は凡て、夫々の立場に立つて見れば、その動機を非難すべきではないであらう。併しその齷す結果は山へ登る者の、望む所と、事毎に背馳してゆく所が多いであらう。此處に問題がある。

今述べた點が當つてゐるとすれば、事態は今後益々山へ登る者の望む所と異つた方へ方へと進んでゆくに違ひない。そして山へ登る者が、唯ぶつづ年中不平を並べてゐるだけといふこととなる。此處に山へ登る者の考へなければならぬ點がある。

俗化した山なぞへは行かない、と云つて澄してゐられゝば別、何とか努力して山の俗化を防ぎ止め度いと思ふならば、たゞ不平だけを云はずに、積極的な努力をする必要がないだらうか。

先にも述べた様に、山へ登る者はたゞ山へ登るだけで、現實に山に手を付けてゐる人達は別の意圖を持つた人達だ。山を、山に登る者のゝ欲する様に護つて行き度いならば、積極的にその欲する所を示す必要がある。山を原始の姿のままに取つて置かうと云つても無理であらう。さうすれば、人工を加へる限界の問題が出て來る。何處まで、如何様に人工を加へても然る可きものか、此處に各種の利害が相争ふのであらう。今迄の所、山へ登る者は大體、出來た結果に不平を云ふだけで、その限界をはつきり示してゐなかつた様だ。

山へ登る者達は、何處までをその限界と思ふか。此處らで一つ、世間一般の人達にも納得のゆく様な、立派な意見を立てたらどうであらう。之こそ、日本山岳會の當然の仕事の一つではあるまいか。

日本山岳會で十分想を練り、原案を日本の山岳團體に示し、その意見を經て、權威あり、然も無理のない誰人も首肯し得る様なものとし、之を世間に發表し、山に手を付けてゐる人達にもその思ふ所を傳へて、山

を護ることに協力を得たらばどうであらうか。

私には上高地の自働車道よりも、穂高の縦走路の路幅の方が氣になつて仕方がない。日本山岳會として働き甲斐のある仕事であり、若し之に成功すれば、日本登山史上之こそ最

主要目次

* 山岳會へ註文一つ

* 北千島行前後 伊藤秀五郎

* 研究欄 初見 一雄

* 羽根布圖 兒島 勘次

* 北鮮の山歩き短報 高橋文太郎

* 再び南島コバのこと 磯貝 勇

* 四國地方のコバと山岳語 磯貝 勇

* 陸地測量部新刊地圖目錄 磯貝 勇

* 新刊紹介 會員通信 磯貝 勇

* 會務報告 磯貝 勇

* 第六十二回小集會 磯貝 勇

* 九月常例理事會 磯貝 勇

* 新入會員 會員住所變更 磯貝 勇

* 代表者變更 新着圖書 磯貝 勇

* 會員寄贈圖書 磯貝 勇

* 有意義ある仕事であり、後から來る登山者に最も感謝さるべき業績ともならう。

日本山岳會への註文一つ、右切に會員諸賢の考慮を願ひ上げる次第である。

北千島行前後

伊藤秀五郎

北千島は、リンドバークが、アラスカからアリニューシヤン群島を経て飛行して来た頃から、國防の上からも新しい意味で問題にされ、産業上からもその開發の必要が認められて數年來、北海道廳の調査隊が派遣されたりして、漸く世人にその存在を知られて来たが、凡そ十年ほど以前迄は、殆ど人々の注意を惹かなかつたところである。既に郡司大尉の報効義會の昔から、數十年の間、時に盛衰の歴史を辿りながらも、占守、幌筈、阿頼度の三島には毎夏二三十の漁場が經營されて、幾百幾千の漁夫が、この本土極北の海に働いて來たのであつたが、世間一般の生活とは直接の關係をもたない遠隔の地であつたが爲に、北海漁業者や、種類の關心を寄せる人達以外には、何等興味の對稱とはならなかつたからである。私が、十年ほど前の學生時代にその北海の孤島阿頼度に、全く漂流記的な生活の一夏を送つた頃にも、我々の北千島に關する知識は實に貧弱なものであつて、今であれば「日本地理大系、北海道樺太編」などを抜いてみても、大略の概念は得られるのであるが、當時は、實際に行つてみる迄は、どんなところか、殆ど見當がつかねたほどであつた。僅か數年後に、かくも急激に今日の如

き状態に變化しようなどとは、想像もしなかつたことである。ただ、私達の山仲間では、アライトには北海の航海者や漁師達に、千島富士と呼ばれるてゐる、かなり高い山のあることがよく話題となつてゐた。それも四十二年に發行された陸地測量部の五萬分の地形圖は、已に發賣を止められてゐたから、僅かに水路部の海圖などに依つて、地形は比較的簡單な單獨火山であるといふ事を知り得たのみで、積雪の状態などに至つては、全く想像にまかせざるより外はなかつた。當時、私達は、ひそかにカムチャツカ遠征を計畫してゐた折でもあつたので、アライトにも機會があつたら行つてみたいとよく話し合つてゐたのである。頂上附近はかなり急傾斜らしいので、若ししたら、雪と氷の非常に面白い山登りが出来るのではないかと考へられてゐたからである。といふのは、大正七年かの夏、單身幌筈島の植物調査に行かれた故工藤博士の語に、阿頼度は夏でも全山白雪に被はれてゐたといふことを傳へ聞いてゐたからで北緯五十度、海拔二千米の山であれば、恒雪は疑ひなく、ひよつとしたらその數年前に樺さんを通じて手に入れたシエンクのピツケルも實際に役立てる機會に恵まれやしないかと

期待してゐたのであつた。事實、機會が來て、同行の小森五作君と二人で札幌を立つ時には、多くの先輩、山友達に送られて、磨ぎすましたピツケルを抱へながら、若々しい興奮に馳られてゐたものである。しかし實際に行つてみると、山はさほど困難もなく登れたし、ピツケルを振ふ必要のある場合などは全く見出せなかつたのであつた。しかし、この登山に於て私達に酬ゐられたところのものは、その期待に反した點を相殺しても、尙餘りあるものであつたからその點に關してはさほど失望した譯ではなかつた。勿論、客觀的にみれば、日本の領土内に氷のある山は一つも存在しないといふ事實が確められたといふ事は、我々登山者を十分失望させるに足るものではあつたが、しかし個人の立場としては、喜びは失望以上に大きかつたのである。尤も、水路部や陸地測量部の測量隊も海岸を廻つたきりで山へは登らなかつたといふから、その山の頂を踏んだのは私達が最初であつた譯なので、従て未知の山に對する不安は無論あつたし、殊に同行の兒玉氏は、永年海で暮して來た人達ではあつたが、山登りの経験は全く無かつた爲に、その登山には少からぬ懸念をもつてゐて、私達が登つてゐる間も、始終安全を祈つてゐてくれたといふことである。私達も十分慎重な態度で當つた。しかし實際にはさして困難な登山ではなかつた。數年

後アーノルド・グブラー博士の一行が第二回目の登山を試みた時には、南浦といふ汽船の停泊地から、一日で頂上迄往復したさうである。私達は、幌筈の山は一つも登る機會はなかつたが、見たところ、多くは平凡な圓錐形火山で、高度も二千米突に滿たず、特に興味を感じなかつた。當時は何れも未登頂のものであつたが、山の狀態がすつかり解つた上では、唯それだけの理由から再び出かけて行く氣にはなれなかつた。正當な意味で、登山者の心を最も強く引きつけるものは山の頂である。そして山登りは、先づその頂を目指すことから始められなければならない。私は、いまでも、そのことを確く信じてゐる。それは、恐らく、山登りの續く限りに於て永遠の眞理であらう。しかし、私達は、遂に頂のみに終始することは出来ない。何故ならば、頂は、山の頂點ではあるが、同時にその重心をも兼ねてゐるからである。山岳の内容は頂に依つて象徴されるよりも更に廣範なものであり、その高さに依つて示されるよりも、より深いものであるからである。そして已に頂の價值を知るものは、更に山岳のもつ内容、言ひ換へれば、山岳の、或は自然の眞正なる崇高を、全體的に理解し享受しようとして欲するに至るからである。まして初登山、初登攀の價値は、未だ何人にも成し遂げられなかつたところの困難を克服するところにある。困難

の伴はない初登山の價値は、殆ど探るに足らないといへよう。私が、その後も、北千島の自然に強い魅力を感じ乍ら、その山登りに特別の興味を見出さなかつた理由はそこにあるそれはとにかく、近年一般の關心が北千島に向けられるやうになつたことは喜ばしいことである。その生物學的調査などは、ずつと前に日本人の手で完成されてゐてもよかつたのであらうと思ふ。因に、最近上梓された「千島の山」に集録された數十葉の寫眞は、極めてよく北千島の自然と風物とを描き出してゐる興味あるものである。

附記 山岳第二十七年第二號岡田喜一氏の「北千島紀行」中に私達のアライト登山が一九二五年となつてゐるのは一九二六年（大正十五年）の誤りであり、佐々君一行の登山が一九二六年とあるのも、一九三〇年（昭和五年）の誤りで、前記グブラー博士らと同行された時の事である。この岡田氏の記事から引用されたらしく、關西學生山岳聯盟報告第四號の兒島勘次君の北千島の記事にも、同様な誤りの間違があるから、特記するほどのことでもないが、この機會に訂正しておきたい。（九・九・二〇）

本年度會費未納の御方は御拂込み願ひます。御送金はなる可く振替東京四八二九番 日本山岳會を御利用願ひます。本月中御拂込みなき御方は集金郵便を差上げます御留守中では差支なき様御願ひます

羽根布團

研究欄



初見 一雄

此處にいふ羽根布團とは取りも直さず羽毛入りシユラーフザツクの事を意味するものであります。暑い時期を除いての寝具としては外に種々御意見も御座いませうが大體羽根入りのものが多く用ひられてゐる様であります。そして多くの優秀な性能を持つものが久しき以前から作られ、又市中に販賣されて居る様であります。今更羽根入り寝具の事を喋々する迄もあるまいと云ふ事は重々承知致しておりますし、且つ私如きものが先輩諸氏をさしおいて書きたてると云ふ事は不省のなはだしいものであります。背ひつゝあつた實を果すためと、それから新規に作らうと云ふ人のために極めて小さな

貢獻ともなり得るならばと云ふ様な考へが心の中に醗酵したしたので斯様な筆を取るに至りました。内容もとり取るに足らず、狭い範圍に於ける貧しい経験と多少聞知致しました事柄とそれから嘗て私が屬しておりました山岳部の部員諸氏の協力して成せる結果を基礎として書き述べる事にします。つまらぬ事を長たらしく書いたもの、又世の中には無駄な時間を費ひやすものがゐるなと呆れられても宜しき次第であります。

て無價値に等しいものであります。市販のものには往々之等の混つてゐるのを見うける次第です。純粹の淡水産（主として鴨・鷺鳥の類）のもの、胸から腹にかけての極く軟かい部分の毛を採集して用ひる様であります。

羽毛は北歐に産するものが善く、中にもオランダ産のものが最上であり、外に支那、日本に産出します。内地産のものも横濱以北に於て集産せられたものが善いと聞きました、そして現在では國産種で充分間に合ふと信じます。

使用すべき羽毛の品種であります、之を分類するに著しい不便を感じるのであります、特定の名稱を缺くために價格によつて差別をつけるより外に方法を見出し得ないので、眞にえげつなき事乍ら左に價格を抜き書き致します。時により若干の變動があるかも知れませんが東京に於ける二軒の間屋（之以外になし）につき調べました結果は大體左の如きものであります。

級	級
A	百匁に對する價格
B	R 以下のもの
C	參圓五拾錢
D	四圓五拾錢
E	六圓
Z	八圓

しりとるもの、二は熱湯を注いで後にとる方法であります、後者の方法は熱湯のために鳥毛の弾力を失はしめる恐れがあります故前者のものを可とします。

次に如何なる品種を如何なる量に充填すべきかと云ふ問題になります、其前に袋の大きさを決定しなければなりません。長さは使用者の身長に、幅は其の人の太さに由來させねばなりません。大凡をとれば長さは使用者の身長より一尺以上一尺五寸迄長く、最少限六尺五寸最大幅員を二尺五寸程度にとると假定して先きを續けます。

山登りの用具は丈夫で輕量であらねばならぬと云ふ事が原則であり、また私共の如く常に風船玉の如き輕さをもつ財布を懷中致しております者にとりましては價格を安く手に入れると云ふ事をもう一つ付け加へねばならないのであります。之は安價なものを購入するのではなく優れた品を安く求めると云ふ意味なのであります。

羽根布團に於ては最輕量にして最高の保温の効果を擧げるべく製作すべきであります。それで入れるべき分量の最大限を三百五十匁、平均三百匁と云ふ結果を得ました。三百五十匁以上填めるとどうかすると羽毛が固まる故かかたい感じが多く、羽根布團本來の軟かい感觸が失はれ徒に重量を増すのみでした。

二百五十匁と云ふ量は分類表のDなる品種を填めたものであります。誰でも御承知の事と思ひますが、同一容積に對する羽毛の重量の比は品種の優良なものの方が輕いのであります、其の意味に於きまして劣種のもの三百匁充填と優種二百匁とは容積に於て均等に近いものであります。

如何なる品種のものをを用ふべきかは作る人の勝手ではありますが、保温の點から申しますと、B 以上のものならば全く同様であると云ひきつて善いと信じます、異なる點は肌觸りの善い悪いと云ふ事だけであり、充填量も、北海道・樺太の如き極寒の地でない限り、平均量で善いと信じております。特別の寒がりやが絶體値迄填めれば宜しいでせう。

保温の點をもう少し詳しく申しますと、其の化學的な作用は未だ詳に致しませんが、同一容積を有する各個の羽根布團は其の内容品種の如何にかかわらず、保温の程度は相等しい、それから同一品種の内容を有する相異なる容積を持つものにありましては大なるものの方が保温の程度が高い、つまり品種B級のものを三百匁填めたものより同B級三百五十匁のものの方が暖かいと云ふ事が判明致しました。

布——私達は羽根布團一個の總重量を五百匁内外で仕上げる考へて其の袋皮を最も輕い丈夫なものを選んで結果又安い經費でと云ふ事をも考慮に入れての結果キャラコを用ひて

ゐるのであります、總じて羽根布圍の皮は目がつんでゐて細い羽毛が絶體に外に飛びださないものであるならば何んでも使用できる筈であります、現今用ひられてゐるものには縹子、更紗等サテン地のもの、稀にボブリシ、羽二重等のものがある様であります、往々市中に見かけるのに防水布を用ひてゐるのがありますがあれは眞に感心致しません。會員藤島氏の經驗がそれを私達に悟らしめまして、山小屋で使用以外は羽根布圍を夏期用の防水シニラフザツクに包んでつまり二重にして使すべきと考へます、布圍皮に防水布を使用する事は一面合理的に考へられますが縫目の箇所は裏側の布共一枚切りであり、其が密着してあります故縫を傳はつて水が浸入して来るのは當然であります。岩小屋とかテント内で使用する時は前述の如く二重にした方が第一保温の効力もぐうんと違ふと云ひ得る次第であります。キヤラコを使用したと云ふ主なる點は價格の低廉であると云ふ事、勿論輕量であると云ふ事も含まれております、一個につき、ハヤール八分(幅の廣い所謂ヤール幅と稱するもの、幅の狭い布では約十一ヤールに四敵する)の布を要し、之の重量が二百十匁あり之に三百匁の羽毛とボタン、絲の目を加へ五百二十匁以下にて仕上げさせた次第であります、縹子其他の布も重量に於ては大同小異であります、すが價格の點は數段上に位置するの

でちります。キヤラコと云つても實質のものに限る次第で高ければ高いだけに何處かしら良い點を有するものであります。金に絲目をつけないと云ふ考へならばマンチエスターのグレンフェル等もきつと善い、手頃のものを送つて呉れるであらうし、又日本の絹織業者に特別注文のものを製作させると云ふ事も行ひ得ると思ひます。私は未だ驗してはみませぬが、麻で織られたものなどからはやや理想的なせのが得られはせぬかと考へております、あまり使ひ古さない上等な麻のハンカチーフを一枚一枚はぎ合せて表皮に用ひる等、事こゝに至ると本の装釘に腐心する氣持と似通つたものが生じて來て面白い事と存じます。要するに義虫の様に滞りこんだ後はたゞ暖かくあればよいのであります故表装は各人の好みによる事は言をまちません。絢爛目を奪ふ許りの緞子に都會の贅をつくすも可なり赤地錦の、綵帛に封建時代の夢を追ふも可なるべく純白の袈裟の羽二重に方丈の靜けさを思ふも可なり、と云ふべきであります。春の野を吹く風の輕きと易きを求めるならば良質のキヤラコと信じておるものであります。形——いさゝか前後するの感があります、形は市販のものゝ中では足の當る部分を箱狀又は梯形に作つたものゝ方が封筒狀のものより優れ

ゐると思ひます、這入り口の繕具には手数はかゝつてもボタン止めの方が善く、フアースナー等と云ふ金具は故障を起し易し又息が凍りついたりなどして開かない場合が多からうと思ひます。大きさは前述しましたから省きます。既に封じ込まれた羽毛の良否をためすには、手で押へつけてから離した後に速に元の位置に復歸する彈力あるもの、手に握つた時の感じが如何にも軟らかである事、指先でこすり合はせても固形物を感觸し能はぬもの無臭なるもの、それから手で支へ持つた時にふわりとした輕さを感じしめるものならば良品であると思つて差支へなし、之ばかりはどつしり構へてゐるのに疎なものはない。蛇足——以上書きならべて來たものは何處の店で作らせたか、又幾何の價格なりやを明記すべきや否やについては會報の性質を考慮して止める事にしました。市販のものにも良い品もあります、が概して然らざるものが多い様であります。運動員店に依るも善いが布圍は布圍屋に限りませう。専門店で自分の氣に入つたのを作らせれば善い之の様な事は山登りの路からは大分横にそれて仕舞つてゐるかも知れませんが、少く共山に行けない時の鬱晴しには善き時間と場所を與へて呉れます。

北鮮の山歩き短報

兒島 勘次

(一) 小長白山脈

(二十萬分の一地形圖、羅南參照)

(同志社山岳部。金子文典同行。人夫四名)

七月三十一日 朱乙温堡—門内

八月一日 渡正山下

八月二日 渡正山—山稜

八月三日 北冠峯—北鞍部

八月四日 北冠峯—中冠峯・冠峯

八月五日 休養

八月六日 西冠峯

八月七日 雲峯・机山峯

八月八日 兜峯

八月九日 (南)雪嶺

八月十日 滞在

八月十一日 樞床峰—上村

八月十二日 山羊臺

八月十三日 合水—吉州

八月十四、十五日 咸興滞在

(二) 赴戰嶺山稜

(二十萬分の一地形圖、洪原、長津)

神商大山岳部、山本明同行

人夫六名内至四名

八月十六日 咸興—(インクライン)

—元豐

八月十七日 達阿里、上洞

八月十八日 安水自山往復—龍岩洞

八月十九日 中白山—三水峠

八月二十日 滞在

八月廿一日 北水山—遮日峯

八月廿二日 滞在

八月廿三日 北水山—東北谷

八月廿四日 雲水里、雲水洞

八月廿五日 雲水山—東谷

八月廿六日 鉢峯—西昌里

八月廿七日 大岩山

八月廿八日 頭雲峯—ノ尾根

八月廿九日 ク

八月三十日 頭雲峯—安基里谷

八月卅一日 陵口里

九月一日 紫眞里

(三)、蓮花山

九月二日 雲山里—蓮花山下

九月三日 蓮花山

(山本と別れ、彼は袂物里に下り

小生は東沙里谷の源流)

九月四日 東沙里

九月五日 德實里—長津(自動車)

(四) 稀峯峯

九月六日 長津—高岩—仁山里(長

津江の筏に便乗)

九月七日 城塞洞谷

九月八日 稀峯峯—仁山里

九月九日 仁山里—龍岩洞(筏)

九月十日 龍岩洞—新芝坡嶺(筏)

九月十一日に自動車にて惠山嶺に

着、十二日は準備にて、十三日より

白頭山及び、南北胎胎山に約十五日

の豫定で登り茂山に出る筈。

最後に羅南の齊藤龍本氏、朝鮮山

岳台の下出、宮島、竹中、飯山の諸

氏及び咸興、新芝坡嶺營林署の諸氏

に非常に親切にして頂いた事を感謝

致します。



再び南島コバのこと

高橋文太郎

會報三七號で「南島に於るコバの方言その他」と題し、主としてコバに關する方言の採集したものを掲載して頂いたが、其後諸先輩から御注意なり御垂教に預つたので、爰に訂正旁若干を記して置き度いと思ふ。

同誌誌上には、すべて檳榔といふ漢字を當て、置いたが、私達が探訪した奄美十島には、この檳榔に當る樹種が無い、尠くとも此の漢字を充用するのは現今では適當でない事が判つたのである。古くは現在ほど確然とした區別が無く、この「檳榔」と「蒲葵」が混用されて居た譯である。そこで私が用いた「檳榔」といふ字はすべて「蒲葵」に置き換へねばならないので、現在この十島に多く自生してゐるのは實に後者なのである。即ち竹内亮博士の御垂教によると、ヤンロウ（檳榔）は *Areca catechu* L. と云ふ東印度原産の喬木にて本邦暖地にては野生なく培養するものがあるのみ、然るにピロウ（蒲葵）は *Livistona chinensis* R. Br.

を云ひ、本邦暖地に野生があつて北端は日本海の沖ノ島にも及んで居るもの、琉球ではクバ、五島ではコバ（別に芽と蓍葉との區別せず）と云ひ居るのである。尙、この兩者は葉の形狀及果實に著しい區別點があつて、同博士が雑誌「福岡」三五號に記された處によると、即ち蒲葵の葉はシユロの葉に非常によく似て所謂掌狀葉であるがシユロと異なる處は全體が遙かに壯大でありかつ葉柄に太いトゲがあることである。ところが檳榔の葉は蘇鐵の葉の如く羽狀複葉である。又果實は前者はシユロによく似た小さな球形であるが後者は稍大形で一寸五分から二寸に及ぶ。植物學上の所屬から云へばピロウ屬に屬し後者はピンロウ屬に屬するのである云々。又、九州青島の蒲葵に屢々檳榔の文字が誤り當てられゐる事が並記されてある。

位ゐになるとピロウと呼ぶ。島民使用の蓍や笠を自製するための材料はこの若葉の未だ蓍のものを用ひるといふ。（昭九、九、一）

四國地方のコバと山岳語二三

磯貝 勇

此の夏、私は四國の中央山地に遊んだ。石槌、瓶ヶ森の山々をあるいて、其の東南に深く切れ込んだ吉野川源流の谷と、其處に營まれるであらう人の生活とに強い誘惑を感じて土佐側に下つてみた。そして吉野川最奥の聚落、寺川、越裏門を振出しに阿波の徳島まで、此の川に寄り添ふやうにして自由氣儘な旅をつづけた。

久方振に接する四國の山水に私の足は輕かつた。殊に吉野川につながる人生を稍々深くみつめることが出来たのは又ない喜びだつた。

其の折採集した「コバ」と言ふ言葉と、其の他二三の山岳語を其處に報告させて戴いて、以前、會報誌上（第二十四號）に發表した資料報告に加へ同志の参考に供し度いと思ふ。

一、愛媛縣新居郡大保木村細野で、六十に餘る老樵夫に聞いたのではコバとは山で木を伐り、山仕事をする山側の小平地だと云ふ。「此處は誰れのコバだ」といふ風に用ふ

るが、もう今の若い者の間には使はれてゐないとも話した。

二、同縣同郡同村今宮でも同じ意味にコバと云ふ言葉が使用されてゐることを聞いた。

三、同縣同郡同村西之川では、大木を倒す時「コバを作る」と云ふ。矢張り山腹に小平地を作ることらしい。

四、高知縣土佐郡本川村寺川では、山腹をナルにして木を置いたりする場所を云ふ。

五、同縣土佐郡本川村高敷では伐採した木材を山から落し出す場所をコバと云ふ。伐り出した木材を落し出すことを「コバする」と云ふ。

六、同縣土佐郡大川村船戸では山で木を伐るのが済むと「コバする」と言つて山から川まで木を落し出す仕事を云ふ。

七、同縣長岡郡吉野村古味でも同じく木を落し出す仕事を「コバをする」と云つてゐる。

以上がコバに關する資料であるが、これを一覽すると、少くとも四國中央山地に於て、コバと云ふ言葉のもつ大體の意味が想像される氣がする。「山日記」の山岳語彙をみると「コバ（飛驒双六谷）薪を切り落す道路、山の禿けたところ」とある。四國の「コバする」の意味と通ずるものがあるのを面白いと思つた。

次に山岳地形稱呼の二三を報告す

る。

○ナベラ

愛媛縣周桑郡千足山村にタカタル（高瀧）と呼ぶ瀧があるが、此の附近にアカナベラ、シロナベラと稱して岩盤上を水の流れる個所がある。ナベラとは緩傾斜をもつた露出岩盤で、その上を水が流れてゐる場合が多い。中國地方にいふナメラと同じ個所である。

○タル

瀧のことをタルと云つた。「タカタル」など。

○タビ、タベ

同じく瀧のことをタベ、或はタビと云ふ。

○サコ

水のない谷をサコと稱して、水のある場合と區別してゐる。

○クボ

山中の窪みをクボと云ふ。「クボ越」

○トウ

山の頂上をトウと云つてゐる。峠のことではない。「山のトウ」といふ風に使用する。

○ラダテ

尾根の上を云ふ。尾根道を「ラドウリ」と云つた。

○ヨコカケ

山腹を横に走つた道をヨコカケと云ふ。

○タキ

山上、山腹に表はれた岩を、四國では廣くタキと呼ぶことは周知のこと

とだが、今度の旅で此の稱呼の生々
と使用されてゐるのを明かに知るこ
とが出来た。「二のタキ」なども稱す
る岩尾根もある。

以上は主として四國中央山地に用
ゐらる地形様命のみで、此の他相當
の山村用語も採集したが、これ等は
父の機會に發表させて置くことにす
る。今度の旅では古い懐かしい山村語
にも可成り出くはした。例へば鈴羊
をニクと云ふなど此の土地に言はれ
てゐることは豫て知つてはゐたが、
實地に耳に聞いてみてはじめて安心
に似た氣持になれるなどはあながち
私だけでもあるまい。

(昭和九・九・一〇)

陸地測量部新刊地圖目錄

二萬五千分一修正	小千谷近傍	二號	見附	一面
"	"	三號	栃尾	一面
"	"	六號	片貝	一面
"	"	一六號	柏崎	一面
宇都宮近傍一七號	小金井	一面		
五萬分一修正	釧路號	五號	標茶	一面
長野號	一三號	長野	一面	
高田號	一號	小千谷	一面	
飯田號	二號	赤穂	一面	
飯田號	三號	飯田	一面	
姫路號	一號	上郡	一面	
"	一四號	津山東部	一面	



會員通信

立山より

拜啓其後は心ならずも全く御無沙
汰勝ちにて失禮仕候、小生八月廿五
日午後一時四十五分に久振りに銀頂
上に着、午後は雨のため長次郎谷を
下り眞砂小舎泊り、廿六日は又風雨
の爲め滞在、廿七日快晴となり元氣
にて銀澤に入り途中の様子を見て引
返し候が今年は到る所残雪多きには
驚き入り申候、廿八日は稀に見る快
晴に恵まれ七時卅分二俣發にて廊下
に入り途中ゆつくり邊りの景色を眺
め入りながら進み前々引返したる所
に出で候が本年は残雪續き居り候た
め大瀧上の岩壁の所まで通り糞食を
とり、なほ右曲せる一部を見、大瀧
下の本流を眺むる事も得られて漸く
積年の希望を達することを得、歸路
につき、夕方二俣に安着、これより
乗越に出で、地獄谷、鏡石、追分等
を経稱名下より藤橋に出で卅一日朝
歸京仕り候、本年は大分雨にあひし
も銀澤入りは理想的にて非常に愉快
に候。

岩永 信雄

立山より

二三日立山方面の高原に遊びまし

た。二十二日の夜半から二十三日早
朝に降雪約千九百米突地帯にまであ
りました。大日小舎屋上三寸、二十
三日降雨の爲めに相當減少しました
が二十四日雷鳥澤の雪溪上に新雪四
寸有りました。未だ紅葉も室堂附近
の小部分で咲き遅れた高山植物は皆
雪をかぶつて居ました。鏡石の小舎
は先日、颱風で又々破壊修繕中です
が、無方針、無定見のために眺望が
良いと云ふだけで建設されるのです
から當然の運命でしやう。殆んど便
用に堪へぬ迄やられてゐます。其他
の小舎には殆んど被害が有りません
でした。二十二日の山日記の満月も
二十三日の暦の満月も俱に上乘の仲
秋の名月でした

九月廿五日 島田 武時

新刊紹介

關西學生山岳聯盟報告 第五號

頒價壹圓

四六倍版、六七頁、主なる内容は
南千島の山(三高)俵一郎、饒鬼谷よ
り五龍及東谷山(關大)中村光郎、白
馬岳より宇奈月(關大)吉田孝雄、
槍北峰尾根(京大)堀龍雄、嚴冬の飛
騾御岳(岐高農)磯野三郎、臺灣遠
征(一九三三)報告(同志社)鹽見正、
入江保太、兒島勘次、他に登高記録
聯盟ノート、及び山の寫眞八葉挿畫
六種。

この報告に就きての批評は何れ山
岳誌上に於て記する處あるべし。



會務報告

第六十二回小集會

昭和九年六月七日 午後七時半

三會堂ニ於テ

一、アラスカの旅(假題)

會員 東 良三氏

小島久太氏の司會にて先づ東氏を
紹介せられ、續いて同氏の講演にう
づいた。その講演の内容は、假題に
示すアラスカのみではなく、一九一
〇年より二十一年間にわたる北米の
山旅の追懷談であつた。何しろ、二
十年間の在米期間であるので、その
足跡は、キヤスケイド、ロツキーから
アラスカまで非常に廣く、從つて講
演もそれからそれへと果しないもの
であつたが、二時間にわたり、か
なり詳細に何ふことができた。終つ
て約三十枚の幻燈板によつて更に補
足的の説明があつた。

當日の講演は速記にして山岳にで
も掲げやうと考へたのだが、速記者
の手をかひで充分に記録できなかつ
たのは残念であつた。尙この次には
一つ／＼の山について詳しいお話を
伺ひたいものだと思つてゐる。

當日は歸朝間もない御多忙中にも

拘らず長い間講演して下さつた東氏
また、當日司會に當つて下さつた小
島氏に深く御禮申上げる次第である
(黒田記)

出席者(順月不同)

武田 久吉 鈴木 正俊 齊藤威三男
齊藤 雄三 坂江 善治 鈴木伊三郎
矢田城太郎 野口 未延 荒井道太郎
丹羽 憲島田 興 横 有 恒
増山清太郎 新庄 珠生 田邊 主計
鍋倉 英夫 田代 豐彌 菊池 明弼
山下助四郎 英木猪之吉 岡本 勝二
宇田川久太郎 淺原重繼 長 沼 重
飯塚篤之助 村尾 金二 逸見 眞雄
三浦 新 酒井 忠一 石塚秀次郎
三田 幸夫 安田登茂次 岩崎京二郎
飛川 維之 中司 文夫 井上 良則
千家 哲磨 小原 勝郎 堀田 彌一
近藤 恒雄 吉田 竹光 角田 吉夫
額田 敏 小島 久太 松方 三郎
田口 一郎 神谷 恭 中屋 健弼
磯貝藤太郎 沼井鐵太郎 田中 菅雄
西川 信義 本多 友司 黒田 孝雄
會員外十四名

九月定例理事會

九月十三日午後七時本會事務所に
て。

出席者

高頭、松方、黒田、伊藤、飯塚、
額田、神谷、田中、逸見、
一、國際山岳協會聯合ニ關スル件
(松方)

一、第六十三回小集會ノ件(逸見)
一、小屋建設後始末ニ關スル件

(松方)

一、來年度新任理事候補者ニ關スル件

一、山岳第二十九年第二號編輯報告

(黒田)

一、會計報告(神谷)

横濱山岳會年報 第二號

山 野 第九號 梓 書 房

山 小 屋 第五號 同

ケルン 九月號 朋 文 堂

登山とスキー 同 黎 明 社

ツリースト 同

ジャパンツリーストビューロー

本邦ニ於ケル體育運動團體ニ關スル

報告 文部大臣官房體育課

地學雜誌 八月號 東京地學協會

旅行 九月號 東京旅行クラブ

旅 行 同 東京アルカウ會

奧多摩 同 奧多摩山岳會

登 山 同 武藏山岳會

黒木立 同 關東山岳會

ベルグ 同 岡山山岳會

旅 同 東京曉山岳會

山 旅 同 八王子山岳會

甲山峽水 同 山梨縣景勝地協會

山 同 横濱山岳會

獨立樹 同 東京山旅クラブ

旅 路 同 關東旅行クラブ

山 彦 同 東京山彦山岳會

山行案内 同 昭和マウントクラブ

アルカウ趣味 九月號

日本アルカウ會

臺灣山岳彙報 九月號

京報山岳會報 同

がくれい會報 同

RSC部報 同

白樺會報 同

東京市山岳部報 同

行雲會報 同

明峯山岳會報 同

日本登高會報 同

服部時計店登山會報 同

東京登山溪流會報 同

廣島山岳會報 同

地の鹽 七月號 東京基督教女子青年會

朝紅 一、二號 高嶺朝紅會

みなかみ會報 八、九月號

奈良山岳會報 七、八、九月號

The Geographical Journal

Vol. LXXXIV No. 2 Aug. 1934

Natural History Vol. XXXIV

No. 5 Sept. 1934

The Prairie Club Bulletin No. 238 Sept. 1934

The Mountaineer Vol. XXVI

No. 10 Sept. 1934

Trail and Timberline No. 190

Aug. 1934

Appalachia Vol. XX No. 5 Aug. 1934

Sept. 1934

La Montagne No. 261 Juillet 1934

Die Alpen No. 8 Aug. 1934

Club Alpino Italiano No. 7-8

Luglio-Agosto 1934

Planinski Vestnik Leto 1934

Stev. 8

Unione Ligue Escursionisti

Anno XX N. 3-9 Agosto-Settembre 1934

Bulletin Del Centre Excursionista De Catalunya Any XLIV

Num. 470 Juliol De 1934

會員寄贈圖書

Sochweizerischer Kalender für Bergsteiger und Skifahrer 1934

以上 松方三郎氏

Introducing the Japanese Alps

by K. Ishikawa (Reprinted from The Asiatic Review, July 1934)

以上 額田 敏氏

編輯後記

幸に會員諸君の御理解により、面白い原稿が次第に集る様になり始めました。編輯者として、まことに嬉しく感ずる次第で御座います。

關西地方に於て未曾有の颱風襲來し、その被害は、想像も及ば無い程甚大なるものに驚き、且つ、同地方の方々に對して深く御同情に堪へないもので御座います。

又近頃上越地方に於て、若き登山者の遭難ありしを聞く、これまた、

「山岳」合本用ケース

- 1、上質バックラム(灰青色)
- 2、背、山岳第何年西曆を押す。
- 3、ピラは両面に會章を押す。
- 4、前後見返し茨木畫伯筆。
- 5、一年分合本用ケースのみを所要の場合、五十錢(送料本會負擔)
- 6、雜誌を本會へ送付され製本料共一圓(返送料本會負擔)

會報綴込用表紙

- 1、ピラは濃綠色レザ、會章押捺
 - 2、背は濃紺色クロス。
 - 3、代金四十錢(送料本會負擔)
- 御入用の方は振替又は小爲替にて御申越下さい。

その人達に對し御見舞申上げるをであります。

時正に秋氣濃か、また巡り來るしき天地は展け、透明限りなき土の中に、紅葉の山に、新雪の峻峯の胸は高鳴り、肉は躍るを感ずるものであります。

諸君から奮躍の跡を誌上に拜見さんも近きにあるかと、刮目してつものであります。

昭和九年十月十八日印刷
昭和九年十月二十日發行

發行 額田 敏

編輯兼印刷人 逸見 眞雄

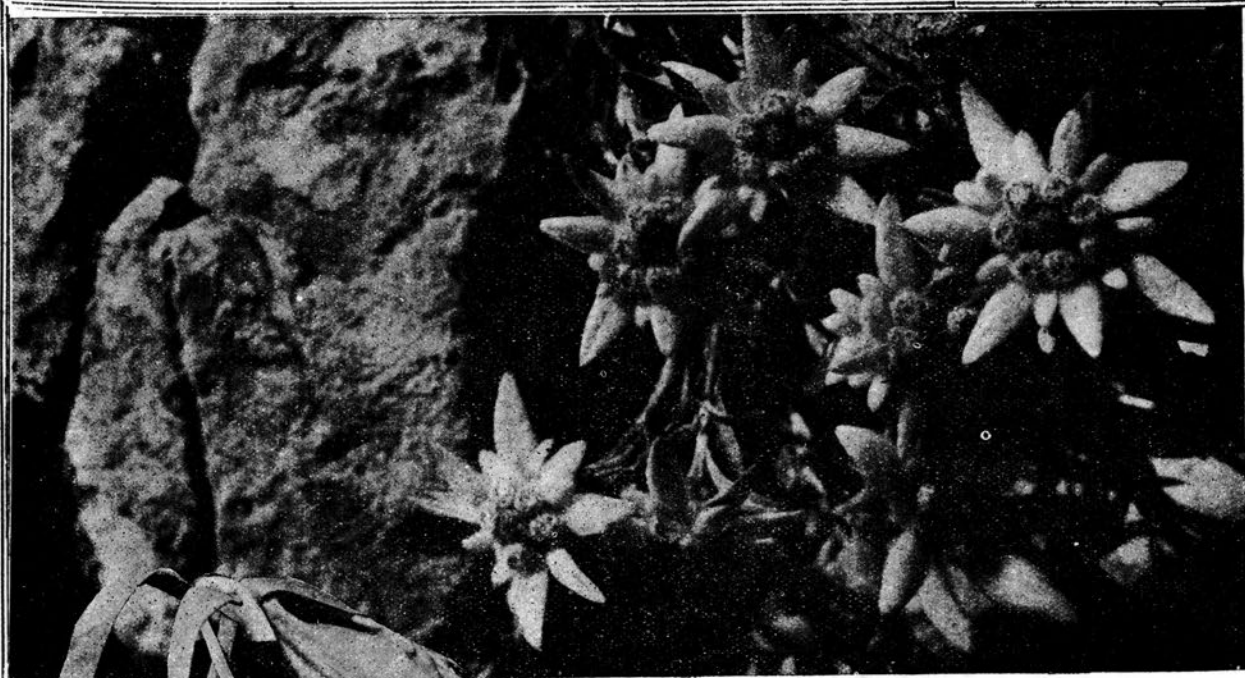
發行所 日本山岳會

電話 芝一六四九番

廣店 一手取扱 進 恒 社

電話 四合・六五四番

(多木印刷所印刷)



サスペンダー付 リップザック

中蔵や北畠で圧倒的な使用を受けつゝあるものでサスペンダーの利用は完全に脊面に合致しスキーのシュウイングや氷壁の登攀にも少しの動揺なく絶對的の安全を望み得るものです。加へてサスペンダーの使用は袋面と脊面とに間隙を生じ換氣良く爲に疲勞を感じる事が殆んどありません。

¥ 7.50

神田小川町
銀座五丁目

美津濃



門專靴一キスと靴山登



秩父宮殿下
高松宮殿下
澄宮殿下
朝香宮殿下
竹田宮殿下
北白川宮殿下
山階宮殿下
賜御用命

(カタログ進呈)

於各種博覽會
名譽賞牌受領

山崎靴店

東京四谷大横丁角